The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	所感
Author(s)	狩野, 直喜
Citation	懐徳. 1941, p. 1-9
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89065
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

帝國圖書館藏

懷德

臨時增刊號

所感

顧問　文學博士　狩野直喜

昭和26.9.10 受入
52219

神武天皇が豐葦原中國を御平定あらせられ、橿原宮に御即位遊ばされてよりこのかた今年は丁度二千六百年に當たりますので、この御祝として曩には東京に於いて、嚴肅にして盛大な御典禮が取行はせられ、天皇皇后兩陛下御行幸啓遊ばされて勅語を賜はり、其翌日の奉祝會にも臨御を仰ぎ同樣な御儀がありました。この御芽出たき時節に遭ひ海内は申すまでもなく、海外にある同胞に至るまで、日本臣民として生を此世に稟けた事を衷心から有難く感謝せぬものは一人もなかつたらふと思ひます。

つら〳〵歴史を考へて見ますと、昔は燦然たる文化をもつた國は澤山ありますけれども、これらは亡んでしまつたのであります。只今ではその土地はありましても、昔居りました固有の民族が亡くなつた處もあります。又民族がありましても、外來民族から征服されてしまつて、その壓制の下に苦みつゝある國があります。西の方ではエジプト、ギリシヤ、ローマ、或はバビロニヤといふやうな、昔は立派な國がありましたけれども、皆亡んでしまつたのであります。たゞ歴史にその跡を遺して居る

だけであります。又お隣の支那はどうかと申しますと、これは土地は殘つて居りますけれども、民族と致しましても、日本のやうな純潔な民族ではありません。それは昔から、東北、或は西方から色々な民族がはいつて來まして、只今は血が混合して、その血は決して純潔ではありませんけれども、その中から純潔な血をもつて居る漢民族もまた多いのであります。けれども易姓革命の國柄であつて、國祚についていつたなら長かつた時もあり短かつた時もあります、先最も長かつた時代を申しますと、第一は周の八百年、第二は漢であります。漢は御承知の通り前漢と後漢、或は西漢、東漢と申しますが、これを合せて丁度四百年から少し延びて居ります。

次は我國へ尤文化の影響を及ぼしました唐、これが普通三百年と申しますが、實は二百八十九年。次が宋で、宋は北宋と南宋に分れて居りますが、支那全體を支配して居りました北宋は僅に百六十七年であります。南宋の百五十年を加へて三百十七年になるのであります。お話にはなりません。元は蒙古民族であつて其民族はあれだけ世界に廣がつて多くの國を創建しましたが支那に君臨した元朝は百年もたゝぬ間に亡びて仕舞ました。明の二百七十餘年、清の二百六十餘年は割合に長かつたですけれども、唐にも及びません。それで歷代のうちで周の八百年が尤長いことになります。周は古代に於て文化の最も發達した時でありまして、文王、武王、周公、孔子と四人の聖人を出したやうな時代であります。周は西から興り後西漢の都となつた長安の附近に鎬京といふ都を立てゝ居ましたが、武王

の子成王の時にどうも西北の方では天下に號令するのは工合が惡いから、支那の眞中に居らうといふので洛邑、只今の洛陽に別に一つの都をこしらへまして、鼎――鼎と申しますのは、夏殷以來の天子から傳つたもので、卽ち之を有つて居るものが天子とあるといふ極めて神聖なものでありますが、その鼎を洛邑に遷しまして、洛邑を東都と致しました。その時にこの周の世がいつまで續くであらうかといふことをトにかけましたが、世をトすること三十、年をトすること七百、卽ち天子としては三十代、年としては七百年續くであらう、さういふ占が出たといふことが、左傳に出て居ります。

然るに周も初は盛んでありましたが、平王の時に犬戎の禍を避けて鎬京から洛邑に移つり程なく春秋時代となりますと王室は次第に衰微し、諸侯が勢ひを得て、朝命を奉ぜぬやうになりました、定王の時に陸渾の戎が都に近い處に居を構へて住んで居たのを楚子がこれを伐つて殲滅してしまつた。さうして戰捷した軍隊を引きつれて、周の國境まで來たので天子が王孫滿といふ者を城外まで出して楚子を勞はらはした。所が楚子が忽然として、王孫滿に、鼎の輕重を問ふた。今でも、一つ相手の實力があるかどうか、ためして見ることを鼎の輕重を問うて見るといふのはこれから始まつて居ます。そこで王孫滿は、王者の位にあるはその德に在つて、鼎の輕重によるのではないとて、前に述べた鼎を都を置いて國祚の長短をトふた事をあげ、世をトすること三十年、年をトすること七百とあるから、周は決してまだ衰へては居ない。諸侯の身分として鼎の輕重を問ふといふやうな無禮なことは出來な

い、と大氣焔を吐いて退けたといふ有名な話があります。尤占では七百と出ましたが、實際は百年も延びて八百年となりましたが、。とも角七百年續つくといふ信念は持つて居た。併し初めから數に限られて居るのであります。申すも畏しこき事ながら天照大御神が皇孫瓊瓊杵尊に給はりました神勅に、「葦原の千五百秋の瑞穗國は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり、宜しく爾皇孫就いて治せ、行矣、寶祚の隆えまさんこと、まさに天壤と窮無かるべし」とありますが、これは事實であると同時に我等日本人の信念であります。七八百年は愚か萬でも億でも數でこれを言ふことは出來ない。其れから考へますと漢土にて最長かつた周の國祚でも一瞬の間に過ぎないのであります。かういふ風に考へますと、この皇紀二千六百年と申しますことは、外國に比しますと、實に長いが、是れは當然であります。私共はたゝ過去に遡つて二千六百年といふことを考へると長いやうでありますが、將來を考へますれば即ち數ではあらはすことは出來ない。未來永劫我等の子孫が皇室にお仕へ申し上げこの紀元の佳節を迎へ奉るごとに、我等と同樣な感激を以て御祝申上げる事を想ふときは、この萬國に比類なき御國に生を享けた幸をしみ〴〵感ずる次第であります。さて吾々はこの國家的の大祝典に對して、たゝおめでたいと申して居るだけでは相すまない。必ず國恩に報い奉るといふ覺悟が大切だと思ふのであります。私共の生れました明治の初めから今日を考へますと、國運の隆盛なることは、恰も旭の天に昇るが如く、世界に於きまする我國の地位といふものは、日清、日露の役を經まして、段々

高まつて參りました。今日不幸にして日支の事變が起りましたが、御稜威により、又海陸將士の健鬪により、又國民全體の努力により、段々と光輝ある効果を擧げて居ります。今色々な言葉が新に製造され、或は東亞の新秩序建設とか、大東亞共榮圈などといふやうな語が倡へられて居ますが、要するにこれは從來東亞に於きましてこれまで歐米諸國から侵略され或は又殖民地同樣にされた民族を我國が指導して立派な獨立國となるやう助力をいたし各其所を得せしむるといふ意味であると思ひます。言換へて見ますと、天皇陛下の廣大無邊の御仁德が東亞に廣がり、世界に廣がるといふことであると思ひます。それでありますから、この時局に於きまして、我等國民はたゝ歷史的の過去のことばかり考へてはなりません。現在を考へ、又將來を考へ、深く自ら省みなくてはならん。かういふ立派な御國に生れ、又この盛時に際會致しまして我等臣民は上下、貴賤の別なく、日本人の名に對して恥かしくないやう東亞の指導者としての資格あるやうに準備を致すことが尤肝要だと思ひます。

これに就て何よりも必要であることは、我が國民の道德的向上だらうと思ひます。只今は識者の間に明治以來の敎育は專ら歐米の眞似ばかりして居た。第一それを改めねばならぬとの議論が起きて、甚結構な事と思ひますが、とも角方今尤も大切なことは國民道德の向上であります。この懷德堂の目的と致してあります德性の涵養、人格の陶冶、これより大切なことはないのであります。これに就きまして、私は論語の一章を想起すのであります。それは論語泰伯篇に出て居る曾子の言葉で、「士不可

以不弘毅。任重而道遠。仁以爲己任。不亦重乎。死而後已不亦遠乎。」とあります。一寸お斷り致して置きたいと思ひますが、凡そ經書を講釋致します時には、その文字を正しく解釋致しまして、その言うた人の意味をそのまゝ傳へるのが尤大切であります。本義の外に私見を雜ぜへたり、附會をしたりすべきものではありませんが、併し或る場合には、斷章取義、卽ち章を斷ち義を取り、自分の話したいと思ふことを助くる材料とする。かういふ遣り方が昔からあります。これは學究のなす事でなく、私などのやるべき業ではありませんが、今日は自ら量らず、其禁を破り斷章取義の方法をもつてこの一章を述べたいと思ふのであります。先づ文字から申しますと、弘毅の弘は、大の義、毅は剛の義でありますが、朱子は此義を引伸して弘を寬廣、毅を强忍と註して居られます。寬廣といふことはどういふことかと申しますと、例へて申せば、この教室でありますと、千人位はいれる容積がありますが、もつと大きな人數を入れやうと思へば、もつと大きな建物が要る。車に致しましても色々な物を載せますが、物が大きければ大きなものを造らなければなりません。弘といふ字は褊狹、或は我見といふやうなことゝ反對で、のんびりとして廣い。さうして車であれば、物を何處までも持つて行くといふ力であります。毅と申しますことは、强忍也とある通り已に或る物を持つた以上は荷が重すぎるといつてそれを半途で廢むることを致さない。石に囓りついても決してはなさずに其目的地へ運び其事業を完了するのが毅であります。弘と毅とは車の兩輪のやうに其一を缺く事は出來ないものであるから

士不可以不弘毅と申されたのであります。

何故に、士以て弘毅ならざる可からずといふかと言へば、その下に、「任重くして道遠し。仁以つて己れが任と爲す、亦重からずや。死して而して後已む、亦遠からずや。」と三段に說明してあります。そこでこれを今私の申上げやうと思ひますことは、つまり斷章取義であります。曾子本來の意味は道德的向上卽ち人格の修養錬磨であつて、つまり仁を目的としての修業であります。この修業をするには弘毅の二字を捨てゝは達せられないことを述べられたのでありますが、今私は此語を斷章取義の方法によりこの時局に卽し我等國民の覺悟、心構へに關する敎訓と假定して御話致さうと思ふのであります。

今申上げますやうに弘毅といふことは、弘は譬へば色々な物を入れるからには、大きな器を必要とする如く、所謂東亞新秩序の建設については其協力を求むる國の中に隣國の支那を始め其他多くの國を含めて居ることは勿論であります、而して日本が之を指導するといふのでありますから、大きなものを車に乘せて目的地へ運ぶやうなものでありまして、第一車が大きく廣くなくてはなりませぬ。只今理事長もお話になりましたやうに、我が日本の忠孝一本の御國體、これは萬國に比類ないものでありますから、吾々が何處までも擁護して進まなければならぬものであります。それでは我國は東亞に於ける諸國に對し如何なる態度で之を指導すればよいか。かういふ御國柄に生を享けました吾々日本

人として指導を致すに、最初から彼等も吾々と同一な思想感情を有して居ると一律に考へたら間違だらうと思ひます。此等の國は第一民族が違ひ、歴史が違ひ、宗教も習慣風俗も違ひます。勿論同じく東亞に國する民族でありますから互に類似した點は、歐米に比較したら澤山ありませうが、決して同一ではありません。尤將來我國が之を指導し互ひに相提携して行きますと、將來日本の聲教文物が段々彼等に影響致しまして、日本風になりませうし又ならなくてはなりませんが、吾々は弘の一字をモットーとして物を容るゝ寛廣の德を以て之に對するの心構へがなければならんと思ふのであります。

毅は今申す通り、ねばり强いといふことで、どんな困難が起つても、それが起れば起るほど一層力を出して、己れの理想に向つて進むといふことが毅であります。仁と申しますことは、孔子の教では一番大事なものであります。又仁が何であるかといふことに就ては、學派により解釋も違ひますが我國が東亞の諸國と共に、其新秩序を建設して、先づ永遠の平和を確立し、猶進んで世界の平和に寄與すといふこの大理想が實現されたら、之れを他の言葉で申述ぶれば、卽ち　天皇陛下の廣大無邊なる御仁德の東亞から歐米諸國まで廣がる事でなくて何でありませう。而して吾々日本國民たる者も亦總て一團となつて、各其德を修め、恐れながらこの御仁德が東亞に廣がり世界に廣がるやうに、翼賛し奉らねばならぬ。その責任を考へましたならば、實にこんな重い責任はないのでありますから、亦重からずやといふことになるのであります。「死して而して後已む、亦遠からずや」、これは唯生命を棄

てるといふことではありません。一體孔子の教は仁を以て目標と致し、造次にも是に於てし、顚沛にも必ず是に於てす、たゞ氣まぐれにやるといふのでない、一生の仕事でありますから死して而して後已むと申すのであります。今これをこの時局にあてはめますと、この大きな我が帝國の理想といふものは、責任が重いと同時に、道遠しと考へなければならんのであります。かういふ東亞の新秩序建設といふことに乘出して世界の舞臺に上つた以上は、これがすぐに出來ると思つたらいかぬ。實に遠いと前から覺悟してかゝらねばならぬ。それであるからこの弘毅といふ二字が主體となつて來て、士以て弘毅ならざる可からずといふことになるのであると思ふのであります。

これは論語を講義したわけではないので、所謂斷章取義の方法により孔子の言葉を藉りまして述べたわけであります。先刻理事長から色々なお話が出ましたが、私も全く御同感に考へるのであります。もう少し申したいこともありますが、經書の講釋は致して居りますけれども、かういふ場合の話は甚だ不得手であります。論語の一章を藉りまして、この紀元二千六百年奉祝の會に私の所感をお話致した次第であります。（藤塚誠二速記）